

一

問一 ① 勤 ② 臨 ③ 映 ④ 神経 ⑤ 資質

問二 a イ b ウ c エ

問三 夕焼けを見ても、美しいなと一瞬思うだけで、その時時の夕焼けをよく見て新たな美しさを発見することもなく、今まで見知っている夕焼けの情景としてとらえてしまう、その心の働きのこと。

問四 我々の日常生活

問五 詩人が日常の言葉の世界を離れ、もう一度この世に生きるような純粋な目で対象を見つめて、これまでになかったような新しい表現を多大な心の労力を使って創造すること。

二

問一 よく考えたらこの世にありえない馬鹿馬鹿しいものたどえ。

問二 「おじさん」に会うときのために彼の住む沖縄について調べて楽しみにしていた娘が、彼が来られなくなったことにさぞがっかりするだろうと思いい、あらかじめ良くない知らせであると娘に心構えをさせると同時に、先に怒って娘の気持ちを代弁することで、彼女の傷ついた気持ちを和らげようと思ったから。

問三 果物は元々好まないが、せっかく義兄が送ってくれたものであるし、何より家族が喜んでるので、付き合っただけのところ、食べ慣れない味に戸惑い、美味しそうに食べる娘に押し付けることで、誰の気持ちも害することなく、無理をする苦行から逃れようと思ったから。

問四 柔らかな橙色の美しく美味な果肉をもつマンゴーのもつ、その果肉の美しさに不似合いな乾いた種をもつことの意外さ、そして高さ10メートルにも及ぶ厚い葉をもつたくましいマンゴーが、実はその源に秘めている不格好な生命のもつ生々しさというもの。

問五 マンゴーの種が魚が木になったものではないことは少女にもわかっている。しかし、少女にとっては、マンゴーの果肉がうちに秘める種を表現するのに、最もふさわしい感じ方であり、真実であった。空に象がいたと言った少年も、空を泳いでいるピアノを見たと言った赤いマフラーの少女も、自分の心の体験を表現したのであって、嘘をついているわけではない。にもかかわらず、人前でそれを口に出すと嘘つきだと責められることは、そのときの

自分の心の体験や感動もなかったことにされてしまうようで、悲しいということ。